

専門職に限らず、在宅医療や介護現場で活躍する異業種・異分野の方へのインタビューシリーズです。

毎日のケアのヒントとして、その取り組みを聞くだけでなく、老いること、生きて死に逝くことについて個人的に考えられていることも併せてお尋ねしていきます。



建築計画・建築史家

木下知威さん

1878(明治11)年、京都の中心地に建てられた「京都盲唖院」。現在の聾学校・盲学校の源流となった学校でもある。そこには、目の見えない、耳の聴こえない子どもたちが、共に学び生活をしていた。その歴史を追い続けている木下さん自身、生まれつき耳が聴こえない。幼いころから「他人とは違う」という思いを抱いていたという。しかし木下さんは、「その『違い』は盲人・聾者に限ったことではない」と述べる。老いに伴って体の機能が低下し、いろいろな「違い」があらわれる。その「違いの存在」を知ることで見えてくる、現代のケアに取り入れるべき視点とは——。

1878(明治11)年に創立された京都盲唖院では、盲・聾(当時は「聾唖」「聰」「瘡唖」などとさまざまな呼称が散見されたが本文では聾と統一する)の子どもたちが、共に勉学に励み、共に生活をしていました。しかし、1923(大正12)年の盲唖分離令(盲人・聾者の生活に必要な特殊な知識・技能を授けることを目的とし、文部省により定められた)により盲・聾教育の分離が進み、盲学校と聾学校とに分かれていきます。

しかし、平成に入つて逆に、少子化のために統合される学校が増えるにつれ、障害児が通う特別支援学校も統合されています。そのなかで、かつての京都盲唖院のように聾学校と盲学校がひとつの建物のなかに両存する

「盲唖院」を辿る
—自らのルーツを求めて

——まず、京都盲唖院への関心をもつたきっかけからお聞かせください。

きっかけは2つあります。

1878(明治11)

年に創立された京都盲唖

院では、盲・聾(当時は「聾唖」「聰」「瘡唖」などとさまざまな呼称が散見されたが本文では聾と統一する)の子どもたちが、共に勉学に励み、共に生活をしていました。しかし、1923(大正12)年の盲唖分離令(盲人・聾者の生活に必要な特殊な知識・技能を授けることを目的とし、文部省により定められた)により盲・聾教育の分離が進み、盲学校と聾学校とに分かれていきます。

しかし、平成に入つて逆に、少子化のため

新たなケアは「違い」の認識から

さまざまな違いが共にあつた京都盲唖院を追つて

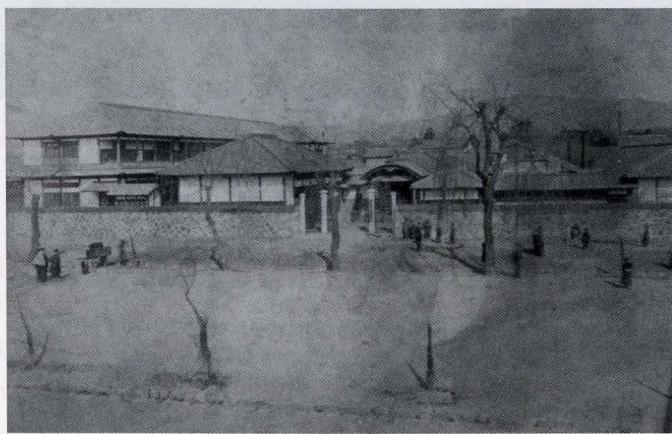
ケースも出てきているのです。

一方、盲・聾学校に関わる人たちは、互いが一緒になることにとっても不安を感じることがあります。お互いの子どもたちは、教育方法もコミュニケーションのとり方も違うからです。しかし、京都盲唖院では、盲人と聴者が一緒に過ごしていた。そこで、いまだからこそ、京都盲唖院が何を成したのか、彼らがめざしたもののはなんだつたのか、周りの人々はどういうに盲唖院をみていたのか、といったことを評価することが必要だと考えました。それがひとつ。

——木下さんご自身はどのように学んでこられたのでしょうか。

わたしが育った1980年代、通った小学校は、どこにでもあるような公立の小学校で、聾学校ではありません。そこで皆と一緒に学ぶクラスと特殊学級(現在の特別支援学級)の2つに通つていて、国語だけは特殊学級、ほかはすべて皆と一緒に机を並べていました。授業では、手話は一切使いませんでしたね。当然、先生の話すことがわからない場合も多く、教科書を読んで理解してきました。

学校では手話ではなく口話(口型より言葉を読み取る。当時、手話は日本語習得の妨げになると考えられていた)によって日本語教育を行なうことが大



第4期（1899～1913年）京都盲唖院の全景
(写真提供：京都府立盲学校)

ひとつの空間での生活から生まれた 盲唖院独自の形

関心をもつたもうひとつきっかけは、2007(平成19)年3月、わたしは博士課程の学生でしたが、京都府立盲学校の資料室を訪れたことがあります。そこには、京都盲唖院について書かれた文書、いわゆる「京盲文書(京都府立盲学校文書)」が320冊以上ありました。それだけ膨大な資料が、十分に研究されることなく眠っていたのです。これらを使つて京都盲唖院の建築を明らかにできないだろうか、と考えました。つまり、京都盲唖院の建築に込められた考えはなにか、そして、盲人と聴者が生活した空間はどのような形だったのか、ということに非常に興味がわいたのです。京都盲唖院には、とりわけ重要な黒板がマグネットで貼りつけられるようになっていて、そこに授業で取り上げられる重要なフレーズが書いてあります。それをもとにわたしを含めた同級生たち4人の生徒たちと会話をしていく、という対話型の授業でした。教科書に書かれている文章の、文意を問うような内容でした。授業で何を伝えようとしているのか、とてもはつきりしていましたね。その授業がいつも楽しみでした。

府立聾学校で数学を教えておられた故・岡本稲丸元教諭の『近代盲聾教育の成立と発展』(京都府教育委員会、1978)と、京都府立聾学校で数学を教えておられた故・岡本稲丸元教諭の『古河太四郎の生涯から』(NHK出版、1997)です。しかし、これは教育史の観点から、京都盲唖院と古河太四郎を研究したのであり、京都盲唖院で盲人と聴者がどのよ

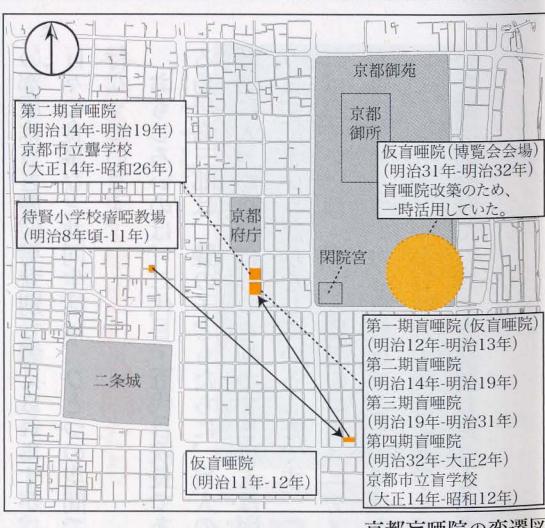
「京都盲聰院」とは?

京都盲聰院(以下、盲聰院)は、1878(明治11)年に京都の「中心地」にあった盲と聾の子どもたちの学校です。学校だけでなく、宿舎も併設されており、「生活」の場として、見えない人と聞こえない人が共に学び暮らしていました。盲聰院の存在を知ったとき、いったいどんな学校だったのだろうと感じました。

1925(大正14)年に盲聰院は京都府立盲学校と聋学校に完全分離したために現存しないですが、膨大な資料が残されていました。そこで、それらの資料に当たりながら、建築学の立場から盲聰院を追いかけたことでした。盲聰院のおもしろさを知つてもうべく、その歴史と成り立ちを少しご紹介します。

1869(明治2)年、明治天皇が東京に移られる「東幸」が行なわれたとき、京都の人々は大変落ち込みました。そこで、京都府は製紙・製革などの工場を設立するという殖産興業で盛り立て直そうとしたのです。また、京都は室町時代から「町組」という住民たちの強いネットワークがあり、加えて全国有数の「寺小屋」を抱える「教育の町」でした。そこで府は、町組を上京区と下京区に分け、その下に各番組を作りました。京都は室町時代から「町組」という住民たちの強いネットワークがあり、加えて全国有数の「寺小屋」を抱える「教育の町」でした。そこで府は、

古河が辞任するなど、厳しい時代がありました。それでもなお、二代目・五代目院長の島居嘉三郎(1855~1943)のもと、「慈善」の名目で寄付金を集めよう、手に職を得るための職工教育が組まれていた点です。



京都盲聰院の変遷図

大黒町にあり、盲聰院の初代院長となる、古河太四郎(1845~1907)が訓導(教諭)をしていました。明治8、9年頃、古河は小学校のなかで「聰聰教場」を設立し、3名の生徒を教えます。そして、1977(明治10)年12月に、愛媛県土族の遠山靈美(1849~?)が「盲聰院を設立してはどうか」と府に上申したのを契機に、丸呂呉服店の建物の一部を改修して、「仮盲聰院」が開校されます。それは、大久保利通が暗殺された10日後、1878(明治11)年5月24日のことでした。教育カリキュラムの特徴は、修身や習字といった教養だけでなく、卒業後の生活が営めるよう、手に職を得るための職工教育が組まれていた点です。

1879(明治12)年に、現在の京都府庁の前に恭明宮という歴代天皇祭祀施設と女官たちの住宅の一部を移築した教場に引越しします。この頃から「京都盲聰院」という名前が定着はじめたものと思われます。当初の予算は府からの「府庁配布金」が主でしたが、1880(明治13)年には明治天皇からの天賜を受け、下賜金千円を得ます。生徒が人力車で通学するための費用を削減する目的のために下賜金で閑院宮の建築を購入し、寄宿舎とするなど勢いがいったのですが、1885(明治18)年からは京都府による琵琶湖疏水工事が開始された影響で「府庁配布金」が停止され、財政難に陥ります。寄宿舎を失つて生徒を減らすうえ、1889(明治22)年末には

おくべきなのです。

(木下知威)

うに学んでいたのかは、明らかにはなっていませんでした。

現代において盲学校と聾学校が統合されるときに、限られた空間をどのように使い分けるかということはとても大切だと思います。

わたしは、大学から建築計画学を学んでいますが、日本初の盲・聾学校がどのような建築だったか明瞭でないことは、福祉施設の歴史や学校の計画史においても大きな問題だと思いました。この研究で、京盲文書などの記録を探して読み、自分のなかで構成しなおしていく作業は、舞台の上で京都盲聾院の人々が役者になって、「京都盲聾院」という劇をしているところをみて、いるような感覚がありました。

――研究を通して知った「盲聾院」は、どのような場所でしたか？

京都盲聾院の場そのもので学んだひとに会つたことはありません。盲聾院は1914（大正3）年に盲部と聾部に分離し、校舎が隣り合っている状況でしたので、大正一桁の生まれの方ですら、入学されたときにすでに京都盲聾院というひとつの学校はなかったのです。

わたしのイメージでは、京都盲聾院はとても

ものにぎやかだったのではないかと感じています。たとえば、明治30年代、京都盲聾院は現在の京都府庁の前、京都第二日赤病院のところにありました（前頁コラム図参照）。敷地は1126坪でしたが、生徒は約150人から約250人に増加する時期でした。こうしてみると、一人当たり4坪ほどしかありません。さらに敷地には教場（教室）、職員室だけでなく寄宿舎、風呂、食堂、運動場があります（次頁の写真）。生活の場をみると、寄宿舎の部屋は盲と聾、男女別と考えられます。日々の食事など共同生活は、ひとつの中間で行なっています。

おもしろいのは、二代目・五代目院長である鳥居嘉三郎は、聾の子どもたちに、盲人の部屋に入つて勝手にものを動かすと盲人は困ります、という訓示をしていることです。これは逆にいえば、盲人と聾者のコミュニケーションが重なりあつていたとも解釈できるのではないか。京都盲聾院の聾部に通学していた聾者のお話で、盲人と交流したことがあ



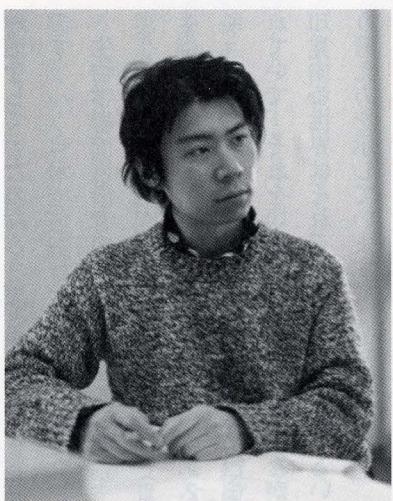
幼稚園時代の木下さん。自宅にて。

みると1つの教室に24～36人の生徒が割り当てられており、ギュッと詰まつたなかで教育をうけ、寮生活をしていたのではないでしょ

うか。

それから、新聞記事や雑誌の調査も重要です。たとえば、大阪と東京で活躍した松崎天民という有名な新聞記者が、京都盲聾院についてくわしい文章を書いています。それによれば、盲生と聾生は同じ教室で教育を受けていません。ここは誤解されやすいところですが、盲と聾は別教室で、教育上はしっかりと区別されました。

しかし、盲聾院が作った年賀状をみると、盲生が和歌を詠み、聾生が日本画を添えています（次頁の写真）。生活の場をみると、寄宿舎の部屋は盲と聾、男女別と考えられます。日々の食事など共同生活は、ひとつの中間で



木下知威 (きのしたともたけ)

1977年、北九州市生まれ。生まれつきの聾者で日常の会話は「手話」あるいは「筆談」にて行なっている。2010年、横浜国立大学大学院修了。学位論文「盲・聾の空間——京都盲聾院の形成過程」で博士(工学)を取得。専攻は建築計画学・建築史。2012年、日本建築学会奨励賞。現在は、京都盲聾院に関する資料調査などを継続するほか、FAXの原型である電送写真、スクラップブックの研究も行なっている。

趣味は、美術館や博物館に足を運ぶこと、ペリエを飲みながら読書すること、ピンボール、テレビゲームなど。ウェブサイトは「ライプラリー・ラビリンス」<http://tmtkknst.com/LL/>

るというのです。たまに自分たちで盲部のところに遊びにいっていたとのことでした。かつて、盲部と聰部は隣同士ということもあつたのでしょうか。そのお話のなかで「昔はよかつた」というひとことが忘れられません。

京都盲聾院には、盲聾院独自のコミュニティがあつた証拠だと思います。つまり、「盲聾院」は、単純に盲学校と聾学校を半分にした学校なのではなく、盲と聰のコミュニティが両存しつつも、重なる部分があり、盲と聰の交流があつた学校ではないかとイメージしています。明治40年に撮影された祝賀会の集合写真(次頁の写真)では、盲生と聰生が入り交じつていることがわかります。

この話は、盲聾院の記録には残らない、オンラインオフィシャルなものです。京盲文書は、盲

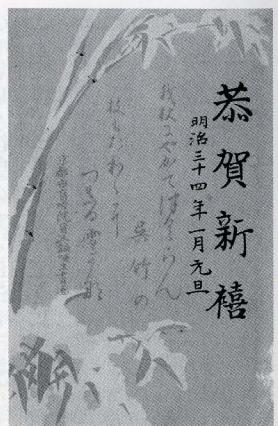
聾院を運営していく側からの視点で書かれたものですから、生徒たちのあいだでなされたプライベートなことは、よほどのことがあれば書かれることはありません。歴史研究において、オーラルヒストリー、手話ですとサインヒストリーといった「記憶を記録すること」が重要ですが、普通は表に出てこない話を聞くことがあります。このように、ヒアリングで、京都盲聾院の関係者やそのご遺族とお会いして話すとき、自分のルーツを辿つているような気持ちになります。なぜなら、おなじ耳が聞こえない人として彼らがかつて体験した時間に思いをはせることで、まるで時空を超えて京都盲聾院のなかに入りこんだようになります。

この年賀状は、京都盲聾院の年賀状です。明治三十四年(1901年)元旦に作成されたもので、右側に「恭賀新年」と書かれており、左側には「新秋子立の日」とあります。この年賀状は、京都盲聾院の年賀状です。

もともと盲・聾学校が分離したのは、それまでの教育方法が違うために、現場で混乱をきたしているという当時の教員の声があったからだと理解しています。ですから、現在の盲人や聾者たちのあいだで、かつての京都盲聾院にネガティブなイメージがあることは否めませんし、彼らのあいだに交流はほとんどないよう見受けられます。つまり要因は、学校が分離することで出会うきっかけがなくなりてしまった、という点にあると思います。

でも、おもしろい話をうかがったことがあります。それは京都府立聾学校の元教諭の奥さんから、戦後まもなくのころ、盲人の女性と聾の男性のご夫婦に会つたというお話です。このときは京都盲聎院で学んだ人が活躍されていた時代ですが、いったいどのように思

分けることで生まれる隔たり



盲聎院の年賀状

(写真提供：児玉光男氏)

疎通をしていたのだろう、と思うようなお話を
です。

生物学者で哲学者のユクスキュル（ドイツ、
1867～1944）の『生物から見た世界』（岩
波文庫、2005）という本があります。ユクス
キュルは、生物はそれぞれシャボン玉に包ま
れていて、それを「環世界」と呼び、個々が
知覚する世界はそれぞれ異なっている、とい
う考え方を示しています。

私自身も、幼いころから自分が聞こえない
ということをよく理解できず、ただなんとな
くぼんやりと「自分はほかの人と違う」とい
う思いをずっと抱いていました。しかし、そ
の「違い」は盲人・聾者に限ったことではな
い、と思うのです。視覚と聴覚はひとが世界
を認識するにあたって重要な感覚です。そし
て、このふたつの感覚は性質がたいへん異
なっていますので、欠如しているもの同士が、
いかに意志疎通をしていくかというのは、と
てもハードルの高いことだと思われていたの
かもしれません。しかし、京都盲聾院は聾者
が字を書いて、盲人がそれを手でなぞつて読
むという機器が開発されたことがあります。現在
は分かれてしまつた盲人と聾者をつなぐもの
として考案されたのでしょうか。

現在の身体障害者研究は、盲の歴史、聾の



1907(明治40)年4月13日 京都盲聾院 鳥居院長と塚田教諭の祝賀会の写真 (写真提供: 京都ラブハウス)

――現代社会で、「違い」をもつ人々が共存
していくには、何が必要でしょうか？

たとえば現在は、60歳、65歳という年齢で
突然「高齢者」とひとくくりにされます。こ
れらの方々は高齢者と分類され、「高齢では
ない人」と別のものになってしまいます。介
護度の認定も、コンピュータによつて判定さ
れますよね。

でも、京都盲聾院で考えると、盲と聾はお
互い違うけれども、たしかに同じ時間・場を
共有していた。つまり、異なる「違い」をも
つ者たちが共存することは、不可能ではない
と信じたいのです。そうした歴史を知ること
は、現代においてもとても大切だと思います。
ニーチェ（ドイツの哲学者、1844～1900）は
『人間的、あまりに人間的（補巻）』（筑摩書房、
1994）という本で「測るものとしてのひと」
という表現をしました。これは、人間は「測
定」を発見して以来、あらゆることを測量し
ようという欲望のもとに生きてきた、という
ことです。ニーチェが生きた19世紀後半は、
歴史的に生理学が大きなキーワードで、生理
学者たちによって身体の感覚が数字的に測定
されました。現代社会における高齢者や障害
者は、このような系譜のなかで分類・定義し
なおされている存在です。ですが、この方法

がいま、行き詰まつてきているのではないで
しょうか。

尺度を決めて分類することで、消えてしま
うものがあります。これからは、たとえ合理
性から逸れようとも、いかにして個々人に対
応していくかということが、より大切になり
ます。

聴者の方が多くおられる特別養護老人ホー
ム「淡路ふくろうの郷」（兵庫県淡路市）を訪れ
たときのことです。そこでは、聴者が施設長
で、スタッフにも聴者の方がいらつしやいま
す。入所者も、聴者をはじめさまざまの方が
共に生活をしていました。その様子をみてい
ると、区分けや分類を超えた、本来のあるべ
き姿をみたように思つたことがあります。

「違い」に先立つ「変化の存在」

項目対立は現代において成立しないことを認識
するということです。

たしかに、それぞれの人が抱える「違いそ
のもの」を理解することはできません。しか
し、「違いがあること」を理解することはでき
る。そこから新しいつきあい＝ケアがスター
トするのではないかと思います。高齢者や妊
婦さんの身体を疑似体験するために身体に重
りをつけることがありますよね。

「違い」を認識しあうことが必要ではないで
しょうか。平等や対等という姿勢のなかで、
そこでは、ここにいると思つた身体がもうそ

こにはなくて、次の階段を歩いている。人の
身体はこうもおぼろげなのか、とショックを
受けたことがあります。

してひとつ目の枠に当てはめることはできない、
ということです。その変化が、いつ、どこに、
どんなふうに訪れるのかは、人によって違
います。だから、個人を制度の枠に当てはめて
分類するのではなく、まずは「変化の存在」
を受け入れる仕組みが大切なだと思います。
たとえば、耳が聞こえにくくなっているのに
身体障害者福祉法に則った検査では身体障害
者ではないと診断されて悩んでいる事例もあ
ります。つまり、白いものと黒いものを考え
るとき、灰色の存在を忘れてはいけない、二
項目対立は現代において成立しないことを認識
するということです。

わたしの研究に多大なる影響を与えた先生

がいます。わたしは、先生の「学問」に対す
る姿勢を尊敬しています。それはまるで、学
問という名前の海にボートひとつで漕ぎ出し
て、知から知の海へとまだ見果てぬ港を目指
す航海だと、勝手ながら先生の本から感じて
います。わたしも少しだけでもそうありたい
と願っていますが、その旅のなかで、京都盲
聴院はほとんど誰も訪れるることのない、小さ
な港なのでしょう。しかし、それはわたしに
とつて、かけがえのない港なのです。

個々人の違いをどのように捉えるのか。最初
から高齢者・障害者という言い方でくるの
ではなく、「身体は連続する」というふうに考
えたいですね。

博士論文は、京都盲聴院の建築がどうやっ
て生まれて、どのようにして消えたのかを追
いかけるものでした。これからは、学校の資

料に限らず、ご存命の盲・聾学校の卒業生や
そのご遺族にお会いしてさらにお話をうかが
うこととを続け資料を収集・整理することで、
京都盲聴院の人々が求めたものはなんだつた
のか、また日本において京都盲聴院とはなん
だったのか、現在の福祉や社会についてどう
位置づけられるものなのか、私なりの考えを
出したいと思います。

芸術家のマルセル・デュシャン（フランス、
1887～1968）の作品に『階段をおりる裸
体 N.O.』という絵があります。徐々に階段
を降りていく、抽象化されたヌードのような
第一印象がある絵画です。人が階段を降りよ
うとする場面を切り取るのではなく、階段を
降りていく身体が連續して描かれています。
そこでは、ここにいると思つた身体がもうそ